

時代を切り開く人材育成

第35回時事通信社「教育奨励賞」優良賞受賞校③

●広島県立大崎海星高等学校



広島県立大崎海星高校(大久保信行校長、生徒数91人)は、瀬戸内海の離島、大崎上島にある1学年1学級の小規模校だ。生徒数が減り、廃校の危機を迎えた2014年度、学校活性化地域協議会を設け、地元の大崎上島町や住民と共に改革に乗りだした。島への誇りや社会に貢献する力を育む「大崎上島学」と、地域おこし協力隊員が個別指導する町営塾を柱に学校を再生。地域の課題解決に向けたアイデアを競う大会への出場や、有名私立大学への進学を果たす生徒が増えた。住民が生きがいを感じ、島が活気づく効果も出ている。(肩書等は取材時)

大崎上島学で多様な体験

同町は、造船業やかんきつ類の栽培が盛ん。人口約7400人で、高齢化率48%と少子高齢化が進む。同校の定員は120人だが、子どもの減少などによって、14年度の生徒数は67人に落ち込んだ。県教育委員会は、17年度から2年連続で80人を割る学校に関し、統廃合を検討する方針を表明。「廃校になれば、家族ごと島を去る人が出かねない」。町は危機感を強め、学校の魅力向上へ支援

を始めた。

①大崎上島学②希望する生徒が無料で学べる町営塾③全国から生徒を受け入れる寮の整備——に取り組み、17年度は88人、18年度は101人の生徒を確保。廃校の危機を脱した。

町営塾は15年度、校内に設けた。生徒が望む進路を実現できるよう、放課後の個別指導に力を入れ、地域おこし協力隊員4人が午後8時まで問題を解かせたり、質問に答えたりしている。国語、数学、英語の日に設けているが、希望する教科を学べる。

大崎上島学は16年度、島を丸ごと教材にした課題発見、解決型教育として創設し「総合的な学習の時間」に実施している。当初は年間35時間、18年度からは70時間に拡充した。各学年2人ずつの担当教諭、学校と地域をつなぐ島出身の「魅力化推進コーディネーター」2人、授業をサポートする非常勤講師1人が企画、運営に当たる。

1年生は「権伝馬」など島の伝統文化や特性に触れることを通じて自分の生き方を考える「羅針盤学」、2年生は産業の現状や課題を学ぶ「潮目学」、3年生は自らテーマを見つけて解決策を提

言する「航界学」。「瀬戸内海で活躍していた水軍は潮の流れを読むのに優れ、時代を切り開いていた」。コーディネーターの取釜宏行さんは「時代の流れを読み、世界で力強く生き抜く『時代の航界士』の育成を目指している」と話す。

6月には、希望する生徒30人余りが1泊2日の「旅する権伝馬」に参加する。権伝馬は、島に200年以上前から伝わる和船。夏祭りでは、地区対抗の勇壮な競漕が行われている。「旅する権伝馬」は10年に住民が始めた行事で、16年から生徒チームの1艇も参加。14人ずつ交代しながら、世界遺産の厳島神社がある宮島(廿日市市)まで片道90分をこぐ。

ほとんどの生徒は、こぐのは初めて。放課後に1回2時間、2、3回練習するだけで本番に臨む。「しんどいが達成感がある。力を合わせればできると実感する子が多い」と兼田侑也教諭。全力を出し切ることや団結力について学ぶ。

働く人にインタビューし、「島の仕事図鑑」をまとめる学習もしている。大学卒業後にUターンして創業90年を迎える家業の造船業に就いた男性や「手を掛けてやった分だけ成果が出る。最後は、いつも自分との闘い」と語るレモン農家。これまでに6冊を制作、100人以上を取り上げた。

協力する商工会の人たちが「プロの写真家が撮影したのか」と驚くほど、生き生きとした表情の写真ばかり。生徒の「なぜ、この仕事をやっているのですか」といったストレートな問い掛けは、島民が人生を振り返るきっかけになっている。生

徒の価値観は広がり、自分がどのような分野で社会に貢献したいか、考えを深める。「地域の人もうれしそう。みんなが元気になる相乗効果が生まれている」(山田万由子教諭)

象徴的なのが「造船海運」の仕事図鑑の裏表紙だ。8地区の権伝馬競漕チームの船頭が、一緒に写真に収まっている。競漕は、地区の名譽を懸けた戦い。「負けたら1年間口を利かない人たちが、生徒に求められて奇跡的に集まった」(取釜さん)。今年6月には「普段から触れる機会になるから」と、地区で使わなくなった権伝馬が学校に譲渡された。「信頼関係の積み重ねがあるからこそ実現した」。取釜さんはほほ笑んだ。

主体性、積極性育む

2年生は、造船、農業、保育のいずれかの現場を選び、課題を調べて解決するためのアイデアを発表する。

ある生徒は、認定こども園を見学し「核家族が増え、地域での助け合いが減った」と聞いた。他の生徒と協力し、高校のイベントなどの際に親同士の交流や子育て相談ができる臨時の「海星保育園」を設けた。1万人近い高校生が参加する学びの祭典「マイプロジェクトアワード2019」で取り組みを発表し、同校の生徒で初めて全国大会に出場。卒業後は、短期大学の保育科に進んだ。

県外の高校生と合宿しながら地域活性化策を議論したり、大学生に自分たちの学びの成果を説明したり、発表や交流の機会が格段に増えた。生徒

を全国募集する学校が集う「地域みらい留学フェスタ」では、教員が学校紹介を行うケースが多いが、同校は、生徒自らがアピールする。「みりょくゆうびん局」という部活動を設け、全校の3分の1超が参加。さまざまな場で、学校や島の魅力を発信している。

兼田教諭は「生徒たちは自分で畑を借り、野菜を育てて文化祭で販売するなど、地域に出て何かをやってみたいという気持ちが強くなった」と語る。積極性が増し、海外の姉妹校への短期留学を希望する生徒も増えた。「個人で1カ月程度、留学する子も毎年2、3人いる」(山田教諭)という。



海星保育園の様子(大崎海星高校提供)

15年度から週1回、AO入試(総合型選抜)を希望する3年生向けの講座も開く。今年度は、30人のうち13人が受講。大崎上島学で多様な体験を重ねた生徒は、AO入試にも強い。町

営塾で学力も身に付け、早稲田、上智、青山学院立命館、関西学院などの有名私大や国立大に複数の生徒が合格するようになった。分野別では「コミュニティデザインを学びたいと、地域政策関係の学科などに進学する子が増えた」(山田教諭)。「ずっと同じ人間関係になる」。こうした理由で、島の中学から同校に入る生徒は4割程度にとどまるため、16年度から生徒の全国募集も始めた。

「留学フェスタで楽しそうに説明していた」中学の時に島の民泊を体験して良かったなど、入学理由はさまざま。島で生まれ育った生徒は「県外の生徒が多いため、中学とは違った考え方を知ることができ、視野が広がる」と喜んでいる。

当初は、企業の寮の空き部屋を町が借りていたが、18年4月に30人が入れる寮を整備した。協力隊員3人が常駐し、生徒の様子を見てアドバイスしたり、希望する活動を学校や地域に伝えたりしてサポートしている。

「この学校に来て良かったことは、地域が抱える問題にいかに対処すればよいかや、今、自分たちができることについて学べることです」。生徒からはこんな感想が聞かれる。

大久保校長は「生徒一人一人の夢の実現に向けて支援するとともに、『地域からさらに信頼される学校』を目標に教育活動に取り組み」と強調。「島内はもとより、島外の中学生や保護者から『行きたい、行かせたい』と思われる学校を目指す」と話している。(阿萬英之＝広島支社)